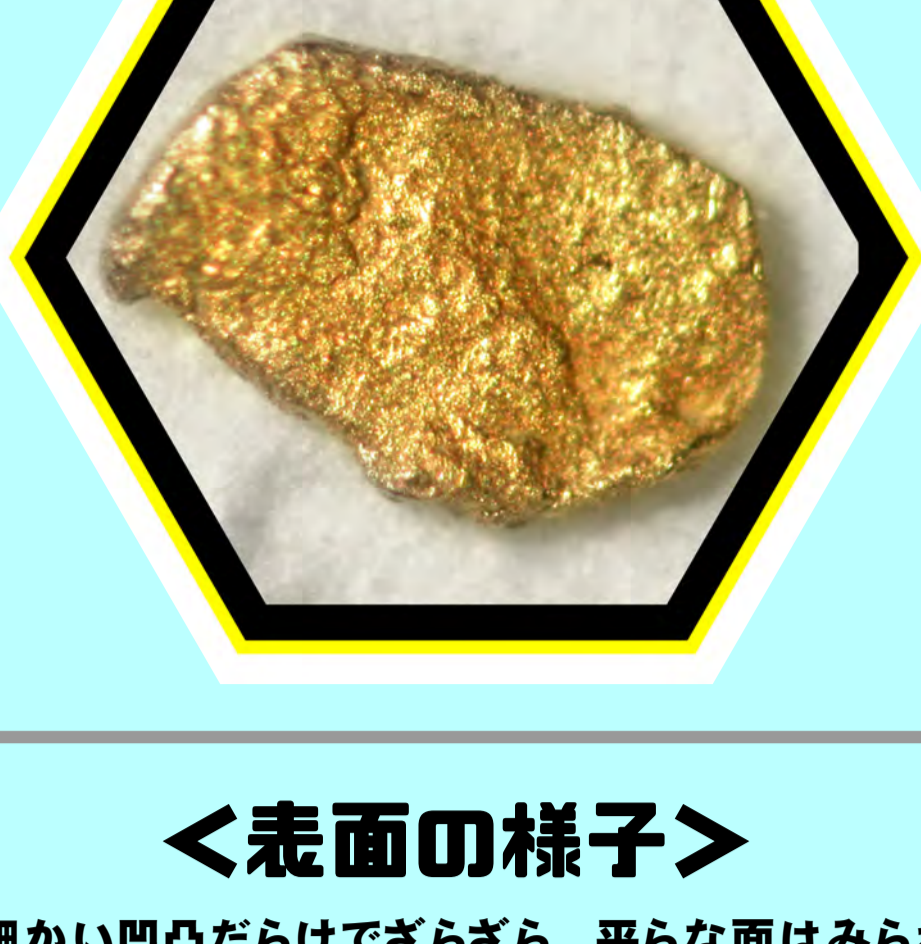
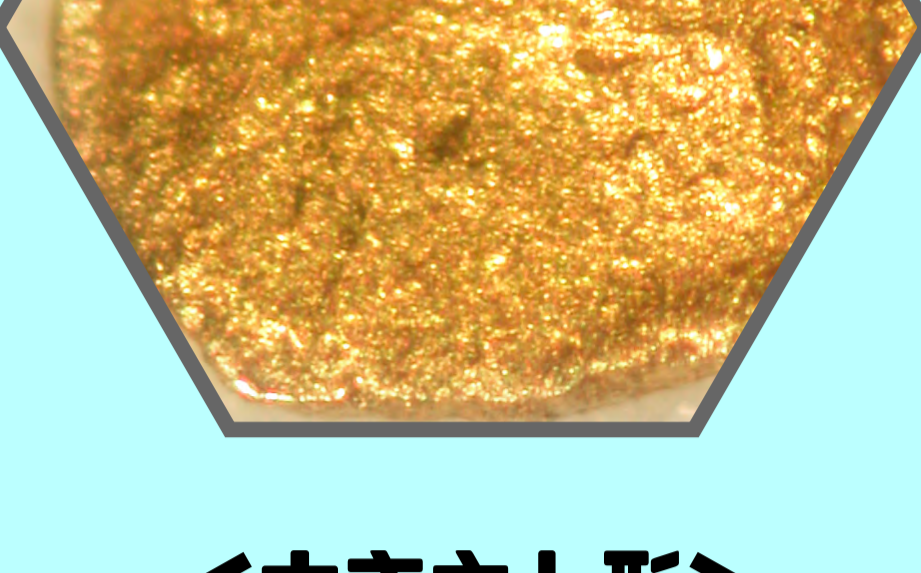


【3】 金色のかけら



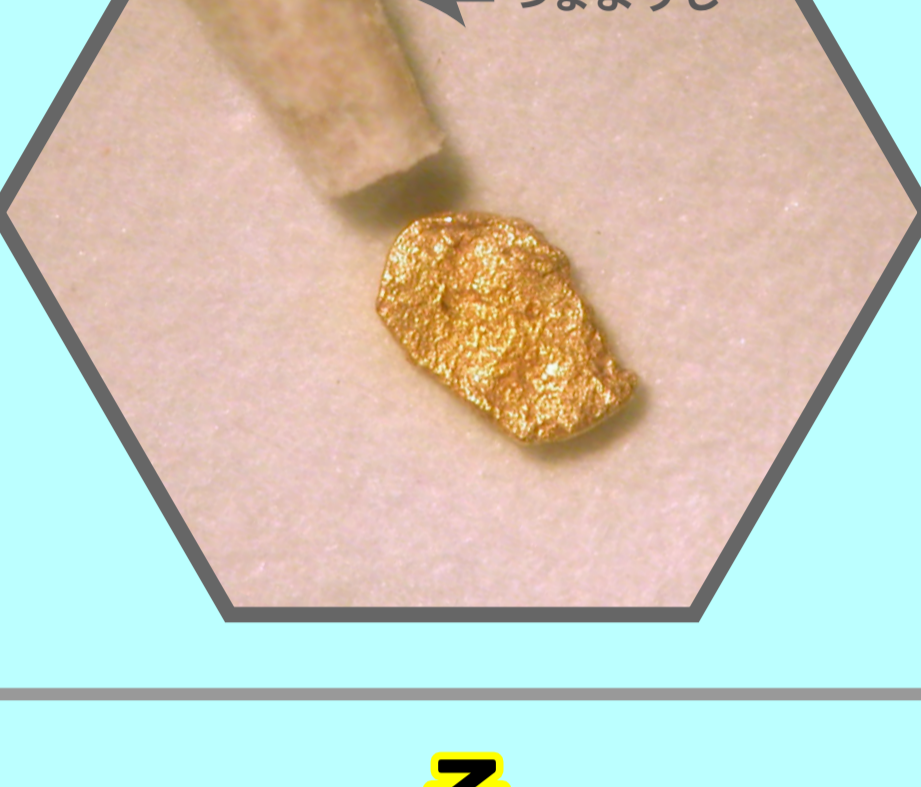
<表面の様子>

細かい凹凸だらけでざらざら。平らな面はみられません。色は金ぴか。光を当てるとキラキラ光ります。



<大きさと形>

大きさはつまようじの先くらい。うすくてコーンフレークのような形をしています。



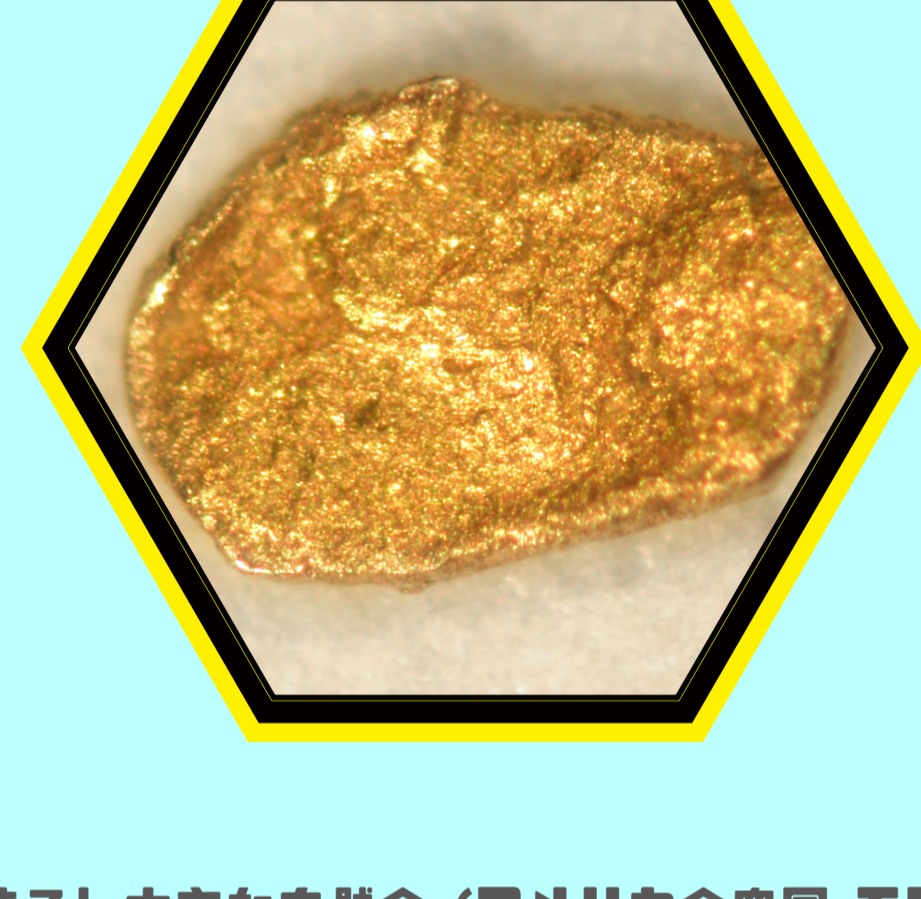
その正体は



金（自然金）

そのものずばり、自然界にある小さな金のかけらです。砂つぶくらいの大きさなので、砂金ともよばれます。

コレーク状の形をしているのは、自然の中で他の石にぶつかりながら、変形してしまったためと考えられます（相模原市緑区産）。



すこし大きな自然金（アメリカ合衆国 モンタナ州産）。



◆大きな金をふくむ岩石はたいていの場合、次のようにできます。

- ① マグマによって地下水が温められる。
- ② 地下水の中に金や石英などの鉱物が溶けだす。
- ③ 岩の割れ目を通して、地下水が地表近くまで上がってくる。
- ④ 地表近くで冷やされた地下水から、金や石英が固体となって沈んでくる。

金山で採掘された、金を含む鉱石（西伊豆産）。金の周りの白い部分は石英という鉱物です。



◆最初にご紹介した標本は神奈川県相模原市の道志川で採取されたものです。丹沢山地からやってきたものと思われます。丹沢山地には、少なくとも約250万年ほど前まで火山があったことがわかっています。金をふくむ石はこの時、火山のはたらきによってできたと考えられます。

金を採取した道志川（相模原市緑区青山）。金は川岸の岩のすき間に挟まっていたり、岩から生えたコケに引っかかっていたりします。

